

## ラグビーにおけるスクラムからの攻撃戦術に関する研究

加藤 尚人 森本 吉謙

キーワード：スクラム，攻撃戦術，ルール改正

Research of attacking strategy on the Rugby Scrum

Naoto Kato Yoshikata Morimoto

### Abstract

This study is intended for the top level of the universities in Japan. The purpose of this study there are three. Did the 1st have change in the tactics from scrum by rule revision? Did the 2nd have change in the gain line breakthrough rate by rule revision? Did the 3rd have change in tactics by the place of a ground? As a result of analyzing for the purpose of the above, the following things became clear.

1. In the area 1, 2009 increased the rate of the Backs attack.
2. In the area 5, 2009 increased the rate of the kick. Moreover, in the side attack, 2009 decreased.
3. Various tactics came to be performed in 2009.
4. As for the gain line breakthrough rate, 2009 were high.
5. As for the rate of a scrum turnover, 2009 were high.

Key Words : Scrum, Attacking strategy, Rule amendment

## I. 緒言

ラグビーとは2つのチームに分かれて行われ、楕円球のボールを奪い合い相手のインゴールまで運ぶ、またはH型のゴールの上部に蹴り入れ得点を競う競技である。縦100m、横70mのグラウンドを使い、80分の試合時間を持続的にプレーする複合的な身体能力が必要なスポーツである。

ラグビーにおける試合場面ではアタック側はトライを取ること、ディフェンス側はアタックからボールを奪うことが課題となっている。アタック側がトライを取るためには、パスまたはキック、ランを活用しこれらを駆使した戦術を組織的に使い前進することによって達成される。ディフェンス側は主にタックルをして倒しジャッカルもしくはオーバー(スイープ)をして達成されることが多い。アタック側、ディフェンス側は様々な戦術がある中で、前もって、あるいは瞬時に、戦術を判断し実行しなければならない。またアタック側は陣地、場所(スペース)によっても戦術が変わってくる。

ラグビーの戦術は様々なものがあり、特にアタック側は戦術によって大きく違いが出てくる。これは、日比野ら(1982)の研究で示されているように、各チームのトライパターン、ゲインライン突破の成功率が使用した戦術によって成功の高低がわかれていることや、アタックをする地域によっても変化することが明らかになっている。

また、高城(2006)の研究でも示されているようにディフェンス側もセットプレーからのディフェンス、2次攻撃以降のディフェンスもそれぞれ違ったものになる。またこれも陣地によってもそれぞれ変化することがわかっている。

ラグビーのゲームは終始インプレーの状態が続くのではなく、およそ100回程度プレーがデット(中断)になり、ゲームが切れる。そしてゲームが切れた後は、その都度、

スクラム、ラインアウト、キックオフ、ドロップアウト、ペナルティーキック、フリーキックのどれかのプレーでゲームが再開されることになる。したがって、これらゲーム再開時の攻撃起点からどれだけ有効なボールを獲得して、どれだけ有効な一次攻撃をするかが、ゲームの勝敗を決する大きな要因であると考えられる。佐伯ら(2002)も、トライに結びついた攻撃の局面は、1次攻防を攻撃の起点とした場合には1次攻撃が最も多くなり、スクラムとペナルティーキックが最もその割合が高かったと述べている。

スクラムはラグビーにおけるゲーム再開時の攻撃起点の1つで、様々な攻撃方法がある。このスクラムについては2008年度にルール改正が行われた。スポーツ競技において、ルール(競技規則)の改正は、ほぼ毎年のように実施されてきた。その理由はさまざまである。プレイヤーの安全に配慮するもの、ゲームの様相に変化を与えようとするものなどである。ラグビーフットボール競技においても同様で、IRB(International Rugby Board=国際ラグビーボード)からの通達、及び日本ラグビーフットボール協会独自のローカルルールの改正とはほぼ毎年のように実施されてきた。2008-2009シーズンにおいて、大きな競技規則の改正が試験的に実施された。それがELV(Experimental Law Variations=試験的实施ルール)(以下ELV)である。2008年5月1日にダブリンで行われたIRB理事会において、その内容が決定され、各国のラグビーフットボール協会に公布された。ELVはいくつかの競技規則の見直しを行うことで、ゲーム様相の変化を促すことを目的としている。例えばタッチに関する競技規則の見直しは、防御チーム側のチームが攻撃側のチームに対してアンフェアなアドバンテージを持たないようにすることである。これによって戦術的なキックとカウンターアタックのスキル向

上が促進されることを目的としている。またゲーム再開のスクラムにおいてオフサイドラインを攻防側ともに5m 広げること、スクラムでボールを獲得したチームにより広いスペースを与えることであり、攻撃のための重要なスペースが生み出されたということである。そのためバリエーション豊かなサインプレーやスピードを活かしたサインプレー、またスクラムからのNo.8などのバックローの攻撃などの選択肢が増えた。このルール改正によりスクラムからどんな戦術を選択するか以前より重要になった。

## II. 研究目的

本研究の目的は、ラグビーにおける国内のトップレベルの大学を対象に、(1)ルール改正前と後ではスクラムからの攻撃戦術が変化したのか、(2)ルール改正によってスクラムからのゲインライン突破率が変化したのか、(3)グラウンドの地域によって戦術が変化するのかを明らかにすることである。

## III. 研究方法

### 1. 分析対象とした試合

研究の対象は、国内大学トップレベルのラグビーゲームで、2009年度と2007年度の全国大学選手権でベスト16に入ったチーム同士の試合とし、その中から試合のVTRを入手できた19試合を分析した。

### 2. 分析項目

分析項目は、(1)スクラムからの攻撃戦術、(2)攻撃戦術によるゲインラインの突破率、(3)スクラムからのターンオーバーについてとした。攻撃戦術は、スクラムから実際に使われているキック、ボックス展開、サイド攻撃、スクラムトライ、8-9攻撃の5つの項目にした。そして特定された攻撃戦術がグラウンドの地域に応じて使われている割合も特

定する。地域分けについては、グラウンドの地域を縦に6つ、横に3つに分けた。図1、図2に地域区分を示した。ゲインライン突破率は、スクラムから攻撃した時にゲインラインを突破する割合を求める。スクラムからのゲインラインについては、スクラムハーフがスクラムにボールを入れる位置をゲインラインとすることにした。スクラムからのターンオーバーについては、スクラム時に反則やスクラムプッシュによりターンオーバーした割合を求めることにする。

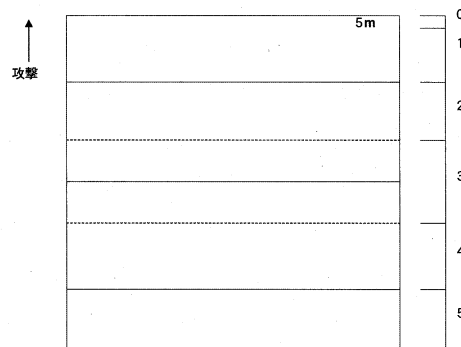


図1 本研究で用いた6つの地域区分

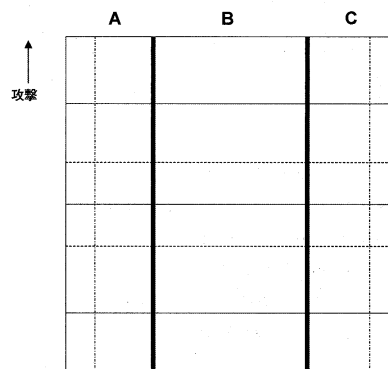


図2 本研究で用いた3つの位置区分

## VI. 結果および考察

### 1. スクラムからの攻撃戦術

2009年度と2007年度のスクラムからの攻撃戦術の割合は全体的に比較してみると選択するプレーに大きな差はみられなかった(図3、図4)。しかし地域別にみると、地域1では2009年ではボックス展開が50.0%、8-9攻撃が12.5%に対して、2007年のボックス展開は36.4%、8-9攻撃は9.1%であ

った。このような結果が得られた1つの要因として古川ら(2009)が2008年度のトップリーグではラインアウトを起点としたトライの大幅な減少がみられ、スクラムを起点とするトライが増加し、ゴール前の得点戦術に変化がみられたことを指摘している。また地域3も、2007年よりも2009年がボックス展開の戦術を使う割合が増大した。さらにキックの戦術の割合は2007年が7.9%に対して2009年は27.5%と増大した。

地域5では、2007年と2009年に大きな違いがみられた。2007年はキックの割合が20.0%に対して2009年は50.0%となり、サイド攻撃の割合が2007年は70.0%に対して2009年は36.4%であった。これはスクラムからディフェンスラインが5m下がったことによりキッカーに直接プレッシャーがかかりにくくなったためだと考えられる。2007年はスクラムから近い位置にディフェンスラインがあるためサイド攻撃をしてプレッシャーを弱めてから地域を脱出するという戦術が多くとられていたからだと推測される。

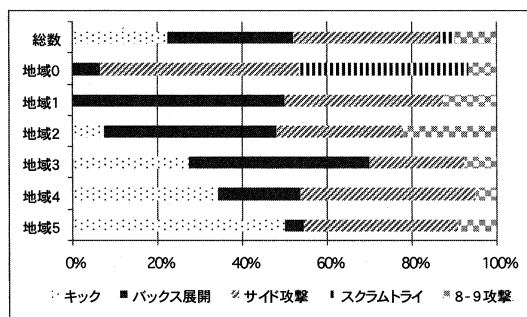


図3 2009年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域別

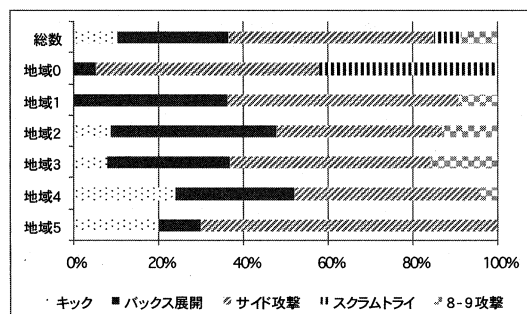


図4 2007年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域別

## 2. 位置別に見たスクラムからの戦術

これらを比べると、ほとんどの位置で2007年よりも2009年の方がボックス展開の割合が増大した。特に、2007年の地域0-Bがサイド攻撃の戦術の割合が100.0%に対して、2009年の地域0-Bでは、キック以外の戦術が多く使われていた(図5、図6)。これは、2009年はディフェンスとの間合いがあるので、ボックス展開や8-9攻撃でもゲインラインを突破しやすくなったため、地域0-Bでも他の戦術が増加したのだと推察される。

また、1のスクラムからの攻撃戦術で地域5の全体で2009年の方がキックの割合が高くなったと言ったが、3つの位置に分けてみると、2007年は、地域5のAからCではキックかサイド攻撃の戦術しかとられてないことに対して、2009年の地域5のAからCまで様々な戦術がとられていた(図7、図8)。廣瀬ら(2009)の研究によると、世界レベルでは自陣22メートル以内ではキックを使用せずに攻撃し、防御を破ろうとする攻撃継続志向が強まったと報告しており、本研究でもキックやサイド攻撃だけでなく様々な攻撃を仕掛けてから陣地を取るという戦術が多くなったと推察される。

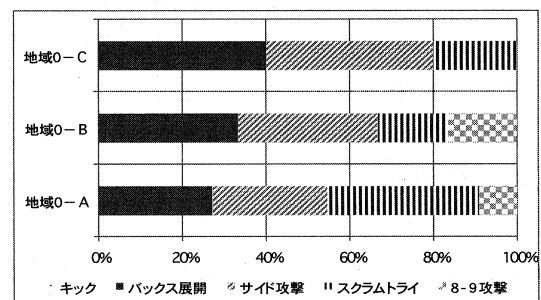


図5 2009年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域0の位置別

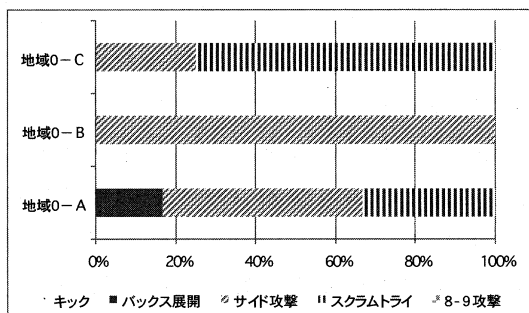


図6 2007年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域0の位置別

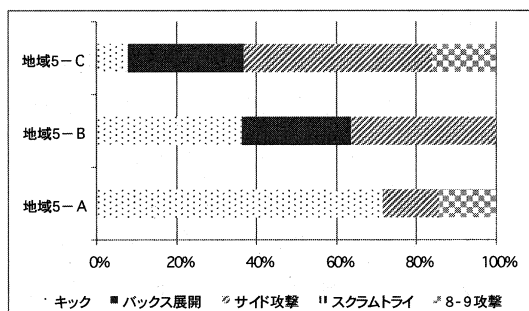


図7 2009年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域5の位置別

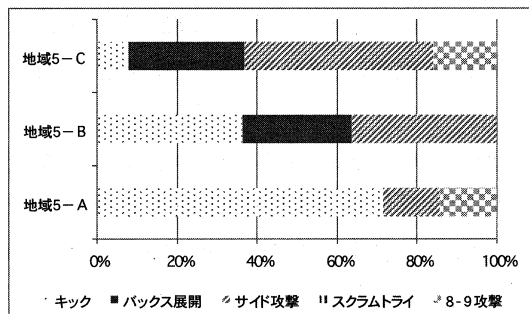


図8 2007年スクラム全体の攻撃戦術の内容 地域5の位置別

### 3. スクラムからのゲインライン突破率

スクラムから1次攻撃でのゲインライン突破の割合は、2009年ではスクラムの回数が全部で228回あり攻めた回数が141回、そのうちゲインラインを突破できた回数は110回で78.0%の割合でゲインラインを突破しており2007年より増大が認められた。廣瀬ら(2009)の世界レベルのテストマッチと日本のトップレベルのトップリーグの試合を対象とした研究によると、ルール改正が行われる2007年度は、1次攻撃を仕掛けるとゲインラインよりも後方にポイントが

できることが32%あり、ゲインライン上と合わせると43%はゲインラインを切っていないことが指摘されている。2008年度では、ゲインライン後方のポイントは18%と減少し、ゲインライン上と合わせると36%になり、2007年度より減少した結果になった。またゲインラインができる割合は、ルール改正後増加していることが報告されており、大学生を対象とした本研究と差異はなかった。

### 4. スクラムからのターンオーバー

2009年と2007年のスクラムでのターンオーバーの割合を比較してみると2007年より2009年の相手にスクラムを押されたり回されたりしてターンオーバーする回数が増加していた。佐伯ら(2002)はトライの起点となったプレーの種類では、1次攻防を起点としたものでは、ペナルティキック・フリーキックを起点としたものとスクラムを起点にしたものがほぼ等しく最も多かったのが認められたと報告している。スクラムからターンオーバーやミスを少なくすることでより試合を優位に進められるのではないかと考えられる。

### 5. ルール改正に伴う戦術の変化

ルール改正前は、スクラムの最後尾に位置するナンバーエイトの脚の位置が、オフサイドラインであった。ラグビーは競技規則上、ボールを前に投げることができないため、ディフェンス側はスクラムハーフからボールが出された瞬間に一斉に前に出て、パスによってボールが空中にある時間に、相手との距離をできるだけ詰めることで、ディフェンス側がゲインラインよりも前でタックルしていることが多くみられたと廣瀬ら(2009)は述べている。ルール改正後はスクラムから5メートル離れることになったのでアタック側は積極的に攻めていく

べきだと考えられる。アタック側にはパスプレー、ランプレー、キックの選択があり、ゴール前以外のスクラムにおいてディフェンス側のフルバックやブラインドウイングはキックに対応して後方に位置することが多い。ゴール前以外のスクラムでは、1次攻撃の場面では高い確率で6対4の状況を作り出せることができるので、数的優位を作りだせるスクラムは最大のチャンスだと考え、ミスを恐れずに自陣からでも積極的にゲインラインの突破を狙っていく戦術に変化していく必要があると考えられる。

## V. 実践面への示唆

本研究では、ラグビーにおけるルール改正前後の戦術の違いを検討した。ただし、本研究の対象は国内トップレベルの大学であったため、異なる競技レベルで本研究の知見が適応するとは限らない。そこで地区レベルの大学において、戦術の違いを比較することで、実践面に対する戦術トレーニング上の示唆を得ることとした。対象とした大学は、東北地区大学ラグビーリーグ1部に所属するS大学であり、の2011年度公式戦の3試合を見た。その結果、S大学の地域別におけるスクラム全体の攻撃戦術を見ると、地域4、地域5でのキックの戦術の割合が圧倒的に高かった。また、ゲイン突破率に関しては、大学のトップレベルのチームよりも低くなる結果になった。これは戦術の選択のみならず、技術、体力的要素との関連も否定できない。しかしこれに近づけるトレーニングの方向性は考慮する必要がある。例えば、S大学は地域4、5でのキックの戦術が圧倒的に多かったが、トップレベルの大学ではこの地域でもバックス展開や8-9攻撃といったハンドリング技術が必要な戦術も多く使われている。こういった自陣の深い地域でも積極的に攻撃を仕掛けるところが、トップレベルの大学であ

り、この技術ができるかできないかがルール改正によってより重要になった。したがって自陣でも積極的にハンドリングスキルを発揮できるスキルトレーニングが必要になることと、よりゲインラインの突破を意識した攻撃、戦術を使うことがトップレベルの大学に近づくことになるのではないだろうか。

## VI. まとめ

本研究では、ラグビーにおける国内のトップレベルの大学を対象に、(1)ルール改正前後ではスクラムからの攻撃戦術が変化したのか、(2)ルール改正によってスクラムからのゲインライン突破率が変化したのか、(3)グラウンドの地域によって戦術が変化するのかを明らかにすることを目的とし、分析した結果、以下のことが明らかになった。

- ①地域1では2007年より2009年の方がバックス展開と8-9攻撃の割合が増大した。
- ②地域5では2007年より2009年の方がキックの割合が増大する結果となった。またサイド攻撃は2009年が2007年より減少する結果となった。
- ③位置別に分析してみると、2007年は位置によっては戦術に偏りが見られたが、2009年は様々な戦術が取られるようになった。
- ④スクラムから1攻撃でのゲインライン突破率は、2007年よりも2009年が増大する結果となった。
- ⑤スクラムでのターンオーバー率は、わずかだが2007年より2009年の方が増大した。

## 文献

- 日比野弘・高森秀蔵・増村昭策・水上茂・和泉武雄(1982)ラグビーにおけるゲーム分析 - 戦術パターンからの一考察 - 。日本体育学会大会、(33)p.638.
- 廣瀬恒平・安ヶ平浩・黒須浩二(2009)ラグビーにおける 2008 年の試験的实施ルール導入による影響について。スポーツコーチング研究、7pp.1-11.
- 石西克有・大西健・岡本昌夫・草野勇・但尾哲哉・中川昭・西川光雄・藤井主計・溝畑寛治(1989)ラグビーゲームにおけるペナルティー攻撃の分析について - 関西大学ラグビー A リーグを対象として - 。日本体育学会大会、(40)p.722.
- 黒岩純・荒川崇・伊藤寿彦・筒井健裕・楚南兼律・松尾勝博・小粥智浩・西機真・上野裕一(2009)ELV がゲームに及ぼす影響 - 流通経済大学ラグビー部 2008 年度公式ゲームを比較して - 。流通経済大学スポーツ健康科学部紀要 1(2)pp.19-27.
- 中川昭・松村径(1998)ラグビーにおける PK からの攻撃戦術に関する研究 - 国内大学トップレベルのゲーム分析から - 。スポーツ運動学研究(11)pp.5-37.
- 佐伯誠司・松本秀雄・八百則和(2002)ラグビーフットボールにおける攻撃の局面とトライの関係 - 2001 年度日本国内のトップチームを対象として - 。日本体育学会大会、(53)p.539.